

# 経 営 部 門

栃木県那須塩原市

小針 勤さん・小針 幸子さん  
(酪農経営)

## 牛舎構造を活かした飼養管理と 循環型酪農経営



小針勤さん、幸子さん夫妻

第39回全国酪農青年女性酪農発表大会農林水産大臣賞

小針牧場は、小針勤さんの父親が昭和35年に1頭の乳牛を飼養したのが始まりである。後継者である小針勤さんは酪農学園大学卒業後にオランダで1年間、実習を経験した後、平成9年に両親の酪農経営に就農した。現在、乳牛216頭（うち経産牛130頭、育成牛等86頭）、飼料作物18.2ha（うち借地10.29ha）の規模を、家族4人（本人、妻、父、母）と研修生1人の労働力で経営している。

小針牧場の経営の特徴と評価点を列記すると一

### ①高い技術力に裏付けられた高収益家族経営

1頭当たり乳量1万1675kg、平均分娩間隔13.2ヵ月、乳脂率3.77%、無脂乳固形分率8.80%。細菌数3.0万/ml以下、体細胞数13.9万/mlの技術成績により、生乳生産原価69.28円/kgの府県では低コスト生産を実現し、酪農所得3982万2000円（所得率26.9%）と、飼料価格が高騰した平成20年度においても家族1人当たりほぼ1000万円の高い所得を確保している。

### ②飼料生産や未利用・低利用資源の活用による飼料自給率の向上

積極的な飼料畑の借り入れや山林を利用した草地造成により飼料基盤を拡大して16.2haの飼料畑を確保し、デントコーン・イタリアンライグラスの生産体系による自給粗飼生産基盤の増強に努めている。また、ビール粕や製造粕類を原料とした発酵混合飼料など、低利用・未利用資源を利用してTMRを給与するなどにより飼料自給率の向上、飼料費の低減に取り組んでいる。なお、自給飼料の作付け面積の増加により、平成20年にバンカーサイロを新設している。

### ③カウコンフォートに配慮した牛舎構造

平成14年に新築した牛舎は、フリーストール

とフリーバーンを対面式にした構造であり、牛の状態に応じ牛の移動を行い、カウコンフォートに配慮するとともに牛の状態に応じた飼養管理を行っている。問題のない牛は1人当たりの管理頭数が多くなるフリーストールで、乾乳前後期、分娩牛・治療牛・高齢牛などは休ませるためにフリーバーンに分けて管理している。これによりふん尿処理（戻したい肥の利用）とオガクズ確保の問題がないことはもちろん、ほかにも大きなメリットがある。まず、牛の状態によって移動が簡単に行える。牛の状態は必ず搾乳時に確認するが、例えば、フリーストール内で蹄を痛めた牛がいればすぐに治療をし、柔らかい床のフリーバーンへ移動し休ませることで早期回復につながっている。また、乾乳牛の前期から後期、搾乳群への移動もスムーズで、牛へのストレスが少なくなり分娩時の事故もほとんどないなど、多くの利点がある。

### ④地域への貢献

栃木県ホルスタイン改良同志会の会員であり、各共進会へ積極的に参加している。このほか、酪農組合青年部活動、消防団（前部長）に積極的に参加し、農家と地域住民との交流を図る目的で毎年春に開催されている「青木農業祭」では実行委員として活躍するなど、積極的に地域の振興にかかわるとともに、中学生の職業体験や県農業大学校生の実習受け入れも行っている。

このように、高い技術成績と借地を基盤とした自給飼料生産や未利用・低利用資源の積極的な活用によって、飼料価格が高騰した平成20年度においても、高い所得を確保している点が高く評価された。

小針さんは今後もコスト意識を強く持ち、より時代に合った循環型酪農経営を目指していく。

# 活動のようす



▲牛舎の周りは圃場が広がる小針牧場全景



▲平成 18 年関東地区ホルスタイン共進会で名誉賞を受賞した「コバリ クラライブ デリア号 EX 91」



▲牛舎内部。左側フリーバーン、右側フリーストールで牛の状態に合わせての管理が可能になった



◀ 牧場の礎を築いてきた両親、研修生とともに



▲バンカーサイロ  
(幅 3.5m × 高さ 3m × 奥行き 20m × 3 基)



▲発酵糞乾施設  
糞尿は効率的に処理できるようになり、乾燥した戻し堆肥は敷き料として利用